

「希望」とは何か。今の時代は、生きる望みそのものが問われる事態が相次いでいる。人間らしく、当たり前で生きるとは、どういうことなのか。自らに突きつけられるとともに、身の回りの人々と触れ合う中で、そんな思いにかられる。

新宿区で始まった「雇用に関する総合相談窓口」業務(センター事業団)には、2重、3重の困難を抱えた人たちが訪れる。残念ながら、その困難を取り除く方策は細切れであり、実質的には機能しない。困難解決の手立てが見出せず、零れ落ちる人々を前に、社会とはどのように機能すべきなのか、を深く考えさせられる。また、困難の格差を前にして、人生を取り囲む環境の破壊が進行していることに、憤りを覚える。そして今、自分は何をすべきなのか、何ができるのか、を深く問い返すとき、協同労働の法制化が本当の意味で「運動」として必要なのだと感じる。

「協同出資・協同経営で働く協同組合を考える議員連盟」が発足して1年。その動きは水面下で渦巻いてきた。地上では、意見書の採択や協同労働の事実が広がった。そして3月、いよいよ水面から地上へと、法制化の渦が吹き上がる段階に差し掛かっている。2/5付日経新聞「風見鶏」(協同の叢見誌199号参照)で紹介された協同労働は、「みんなが労働者で、みんなで出資して経営する仕組み」と報じられた。労働者性とは何か、を巡って続いた議論を法制化

の作業に落とし込む段階に入った。その意味でこの春は、本当の意味で協同労働法制化運動の正念場となるだろう。

法制化を地上に引き上げたのは、「大失業・大倒産」が進行する危機的社会状況だ。豊田市で開かれた「雇用不安・大失業と労働の未来2009」シンポジウム(2/22)では、労働の未来が生命の未来を決定付ける最重要課題であることが示された。未来を捻じ曲げ狭めてきた元凶に迫り、打つべき緊急の手立てと、取るべき中長期的な進路を探る好機となった。このシンポジウムが全国を縦断する中で、この社会を破壊した元凶を厳しく追求する機運を高めていかなければいけない。そして何よりも、希望と未来を失いつつある人々に、確かに希望と未来はここにあることを示すシンポジウムとして広げていかなければならない。開催すればよい、という類のものではないという自覚を高め、今ある力を総動員する覚悟であり、希望と未来を示す力と知恵の総結集が求められる。その呼びかけが「反失業100万人ネットワーク」への参加呼びかけだ。

6月の第30回総会を迎える頃には、法制化・反失業・仕事おこしがひとつになった協同労働運動の希望と未来を共有し、社会に発信しなければならない。今総会では、「食・農・環境 仕事おこしチャレンジコンテスト(仮)」も開催予定である。また、「公共の再生」を担う協同組合運動のチャレンジも重要なテーマとなる。30年の節目にふ

さわしい、新しい段階の総会に、是非たくさんの方たちに参加してほしいと願う。

重松清著「希望が丘の人々」を読んだ。「希望」とは何かに迫る大作だ。同時に、「人間の生きる糧」を考えさせられた。そして思うのは、「希望」とは「一人ぼっちじゃない」ということではないか。重松清のさまざまな小説を思い起こしても、そのこと

がメッセージとして心に響いてくる。「一人ぼっちじゃない」からこそ生まれるもの。「協同」を深めること、「協同労働」を呼びかけることは、その事から始めなければ、と思う。「希望ある社会」とはそうした社会のはずだ。だからこそ、労働から希望を生み出すこの運動が、必要性を増している。

研究所だより

関 智子

3月も半ばを過ぎ、春の足音がもうそこまで聞こえてくるようになりました。春と言えば出会いの季節です。ワーカーズコープでもこの4月から多くの現場が立ち上がり、たくさん仲間が入ってきます。

先日、千葉県東金市で行われた子育て支援事業所の合宿に参加しました。冒頭、春から立ち上がる現場の紹介がありましたが、多くの現場が立ち上がり、子育て支援現場の勢いには凄まじいものがあります。3～4年前までは東京の数カ所だけだったのが、今は東京から全国各地に子育て支援現場は広がっています。

この4月から立ち上がる現場の一つとして、長野県上田市の児童クラブがあります。市内の全児童クラブ及び併設児童館の21カ所が立ち上がり、立ち上がる現場の数としてはもっとも多い数となります。

上田市は私の出身地のお隣の自治体でもあり、立ち上がる現場数の多さにびっくりしているところです。協同労働法制化の地方議会の意見書採択は長野県が最も多い訳で

すが、この上田市は未採択の自治体です。この勢いで3月議会は採択をめざしたいところです。

協同総研に赴任になってやっと半年経過した時点で、いろいろな仕事にも慣れてきたし、これからという時期ではありましたが、今回上田市児童クラブを立ち上げるにあたり、センター事業団に復帰し、上田事業所に赴任することとなりました。上田市の全児童クラブを一括で管理を任されたので、上田市の子育て支援を担う意味でも大変意義のあることだと思っています。

20も現場があるので、人材集めが大変です。現在は市直営で運営されていてほとんどの職員の方が応募をしてくださったこともあって、概ね決まりつつありますが、まだまだ足りない状況です。それに面接を行うのも一苦勞です。1週間で50人近くの方と面接をしました。面接には東京事業本部から2名応援に来てくださり、大変心強いものがありました。やはり、こういうときはワーカーズコープの良さや、全国展開の良さを感じるもので